

親子クジラとの出会い タヒチ・ルルトウ島

写真/文 鍵井靖章

タヒチ島から南に位置するオーストラル諸島。その中の島のひとつ、まだ観光化されていないルルトウ島に毎年、親子のザトウクジラが回遊してくる。

火山島である島は周囲38kmにおよび、隆起したサンゴ礁と溶岩によって独特の海岸線を築いている。人口は約2000人。1769年にクック船長に発見され、かつては独特の伝統的捕鯨を行っていた島である。そのルルトウ島が、数年前からザトウクジラと泳げる海として注目を浴びている。

毎年、この島の周囲で確認される親子のザトウクジラは数頭から数十頭。毎年5月になると、南極海からやってきて、この暖かい海域で出産、子育てを行う。そして11月になると再び南極海に戻って行く。

ホエール・スイム&ウォッチングに使用するのは地元タヒチアンが漁で使用する小型ボート。私が乗り込んだボートの舵をとるキャプテン、ドミニックは、かつて捕鯨が行われていた時代に代々受け継がれた銚手の末裔にあたる。もし1957年にこの島で捕鯨が禁止されていなければ、彼は現在も銚1本でクジラに向かっていたのかもしれない。いつも彼は、目を凝らし静かに海を眺めていた。

眼下に広がるタヒチの青い海。小さな波の狭間にクジラの影が映った。ゆっくりと船で近づき距離をおいて、静かに入水した。不安と期待の中、一直線にフィンキックを続けた。前方に子クジラが見えてきた。生後3~4ヶ月の個体で体長は約7メートル。水深13メートル付近で潮の流れに身を任せじっとしている母クジラと水面との間で潜水を繰り返している。子クジラは私たちの存在に気がつくと、私たちの周りを泳ぎ始めた。その姿はまるでイルカのように好奇心旺盛で私たちに急接近しては、大きな丸い瞳でこちらを覗いた。

海は子クジラの遊び場となり、僕たちはまるでお風呂に浮かんだプラスチックの玩具のように漂った。数分後、母クジラはスーッと浮上し子クジラと泳ぎ去って行った。母クジラがまるで子クジラの手をとって泳ぎ去る姿がとても印象的だった。

撮影を終えて港に帰る途中、母クジラの隣で水面からジャンプしている子クジラに出会った。未だ知らぬ南極海に旅立つ時期はもうすぐかも知れない。

まるで手をつないでいるようなクジラの親子。
なんとほほえましい……。

青いヴェータ **Photo Column** 01

※「ヴェータ」とはサンスクリット語で「知識」もしくは「科学」を意味する